

## 公開講演会「記録の未来—電子時代におけるアーカイブズ学を考える—」に参加して

京都大学大学文書館  
清水 善仁

去る2006年10月20日、私は学習院大学において開催された公開講演会「記録の未来—電子時代におけるアーカイブズ学を考える—」に参加した。これは、同月17日よりおこなわれた「第2回アジア太平洋アーカイブズ学教育国際会議」の一環として開催されたものである。当日は3名の研究者による講演がおこなわれ、多数の参加者を得た。まずはそのタイトルと共に内容の梗概を記したい。

キャロライン・ウィリアムズ氏「アーカイブズ学理論と実践—評価選別の文脈から—」は、アーカイブズの理論と実践の関係について、「実務者、専門職協会、教育者という中核をなす三者の関係性」(公開講演会予稿集より引用、以下、予稿集)を、評価・選別という一つのケーススタディーから検討したものである。イギリスでは、理論と実践との間に大きな乖離が見られるという。そのようななかで氏が強調するのは、理論と実践は二者択一というものではなく、常に関連性のあるものであり、上記のような状況を考えた場合、理論が実践のニーズに適応していることが何より重要で、そのことが理解されれば、理論と実践の有効な関係が構築できるとしている。

ルチアナ・ドゥランチ氏「アーキビストの役割における連続と変容—InterPARESプロジェクトの成果から—」は、「デジタル記録の長

期保存のための多国間共同による学際的調査研究プロジェクト」(予稿集)であるInterPARESプロジェクトの概要紹介とともに、そのなかで発見・検討された、記録に関わる諸事象についての分析をおこなったものである。2段階あるInterPARESプロジェクトは、アーカイブズ学研究者のみならず、弁護士その他、様々な立場からの参加者を得ておこなわれたもので、特に記録の真正性をめぐって多くの検討がなされている。この問題については日本でも近年よく指摘されているところであり、これをどのように捕捉していくかが重要な論点となっている。

カレン・アンダーソン氏「専門職間のパートナーシップでアーカイブズ学教育の未来を確かなものに」は、専門職(アーキビスト)養成にあたっては「様々なタイプの専門的なパートナーシップ」(予稿集)の必要性があることを指摘し、オーストラリアの事例を中心に、世界的なパートナーシップの現状・課題についてもあわせて検討したものである。オーストラリアにおける諸専門者集団の活動を紹介し、これを含めた国内外の諸団体との連携・協力によって、専門職養成のためのプログラムを開発し継続させると同時に、記録保存管理(record keeping)の発展を目指している。

以上3講演はいずれも世界のアーカイブズ学の最前線であり、日本のアーカイブズ学のこれからにとって大変有意義なものであったと思う。もちろん、今回の講演内容をそのまま日本に当てはめることはできない。アーカイブズ学教育やアーカイブズ・システムの点で、諸外国と日本は大きくその土壌を異にするからである。ただ、日本は諸外国に比すれば、確かにアーカイブズの諸側面において立ち遅れているが、しかしそれは逆に言えば、諸外国の良い面も悪い面も同時に知ることができ、それらを生かすことができるという利点でもある。理論と実践の関係、電子記録への対応、専門職間の協力、これらはすべて、これからの日本のアーカイブズ学の発展にと

って必要不可欠な要素である。「ならば日本は今後、どう取り組んでいくのか。」——今回の講演を受けて、我々一人ひとりに投げかけられた課題とは、まさにこのことではないだろうか。

私は現在、大学アーカイブズで働いている。大学アーカイブズにとっても、今回の講演で指摘された諸点は重く受け止めるべきものであろう。大学アーカイブズの議論が近年、活況の様相を呈しているなか、私もそこに所属する者の一人として、先学に学び、かつ今回の講演も踏まえながら、大学アーカイブズの業務と研究にさらに取り組んでいきたいと思っている。